第345回読書会

日時 2006年4月23日（日）　１３：００－１７：００
会場 東中野地域センター　　洋室：１～２（１階）
東京都中野区東中野４－２５－５－１０１ TEL ０３－３３６４－６６７７
テキスト ４月のテキスト
短編小説　『選手』行動　昭和10年6月号（3月の送付資料）予定

「選手」

先月の「幸福の鏡」にあった、奇跡を信じない人という表現がそのまま当てはまる金井。彼にとって出世することだけが第一義であり、まさしく出世レースの選手として走り続ける金井の、その内面に精神的なものは見られない。

目下の者を見下して、待っている部下に声ひとつ掛けなかったり、百合子と一木にもう愛情がないと思い，復讐をとげたように喜んだりと、その俗物さをあらわにしている。

しかし、金井の社会的地位は高く、世間的には尊敬される人物であり、自分自身その地位に誇りを持っているようだが、その肩書きがなくなった時、人間一個人という選手として立った時、いったい何を誇りに持つのだろう。

一方、一木は社会的なものを全て捨て、ただ一個人として内面の中だけで生きている。

夏目漱石の「それから」の中で、「食べる為に働くのは労力の堕落だ」と言って仕事をしない主人公代助は、職業のために汚されない内容の多い時間を有する上等人種だと、自分のことを考えている。これは明治の話だが、一木もまた、代助同様仕事をしない。

フランスの地図ばかり見ている一木は､帰国したばかりの芹沢先生の姿を連想させるが、一木にとってもフランスでの生活が夢のようだったのではないか。あまりにも素晴らしい体験、充実した日々を送ったためそれが忘れられず、今の日本の現状に耐えられ無かったのかもしれない。

フランスにいた頃のように自分を燃やせるものが見つからない。それを焦って見つけようともしない。今で言う「燃え尽き症候群」か。

競争社会から離脱し、選手であることを捨てた一木だが、羊の群れには入れないという自負心だけは強く、尚のこと何も出来なくしている。

そして、心配する妻をも軽蔑し、孤高の人のように見えるが、人生は困難を乗り越えてこそ修養だと思うので、何もせず他人を見下す一木もまた、好意的には見れない。

しかし、この昭和十年という時代背景から見ると、国際状況を見極められず激化していく軍国主義に知識人は呆れ､意思表示として何もせずじっとしているしかないという姿を、一木を通して暗示しているのかもしれない。